

沿岸有用資源の種苗生産と効率的な放流技術開発

(増養殖技術開発)

内田 浩

1. 研究目的

栽培対象種であるメガイアワビの種苗放流は平成7年度から本格的に開始され、現在では県内各地先で放流が実施されている。しかしながら、その放流効果は明確になっていないのが現状である。また、これまでの調査により、放流直後の減耗率が非常に高いことが分かってきた。この初期減耗を少しでも押さえることができれば、放流群の漁獲加入量が増加すると考えられる。したがって、減耗原因が、食害によるのか、環境変化によるのか等を調査して効率的な放流方法を検討する。さらに地域を選定してメガイアワビの放流効果調査を実施する。

2. 研究方法

(1) 放流効果調査

多伎町漁協を調査対象とし、アワビ類の漁獲動向や、水揚げされたメガイアワビの殻長及び放流貝の混獲率を調査した。

(2) 効率的な放流技術開発

逸散や食害を防止した保護枠(1.5×1.5×0.4m)の中にメガイアワビを放流した。保護枠は側面と上面をネットで覆ったものと、側面のみ覆ったものとし、逸散を防止するために袖網を付けて、その上にサンドバックや石等で海底に固定した。放流したアワビは、殻長30mmのメガイアワビで、各枠75個とした。そして、放流後1週間後、1ヶ月後、2ヵ月後スクーバ潜水により、斃死した個体も含めて全てのアワビを回収した。

3. 研究結果

(1) 放流効果調査

平成16年の多伎町漁協アワビ漁獲量は、2,284kgで過去10年平均の2倍、前年度の1.4倍となった。平成12年以降漁獲量は増加傾向あり、平成元～3年の水準に近づきつつある。漁獲対象であるクロアワビ、メガイアワビ両種とも漁獲量は増加している。クロアワビの種苗放流は実施されていないが、アワビ稚貝の害敵であるヒトデ類(主にイトマキヒトデ)の駆除を平成8年から実施しており、その効果の表われとも考えられる。メガイアワビは、平成10年から2～5万個程度が継続して放流されており、平成17年1～2月の放流貝の混獲率は78%であった。

(2) 放流技術開発

回収結果を表に示す。上面ネットによる保護効果があり、枠内の生存個数は、上面ネットの無い区に比べて高い。しかし、放流7日後の調査において既に、生存個数23個と非常に低下している。低下の原因は不明である。枠内での斃死貝(殻のみ)の発見数も少ないので、逸散の割合が高いと考えられるが、外敵による持ち出し、荒天による分散とも考えられる。潜水調査において、枠外にも放流貝が確認されたので、枠からの逸散は防止できなかった。その後、枠内に残ったアワビも徐々に減少する。

表 回収結果

	月 日(放流後経過日数)	6月16日(7日)	7月7日(28日)	8月9日(61日)
上面ネットあり	生存個数(%)	23(30.7)	8(10.7)	14(18.7)
	生存個数+殻のみ(%)	26(34.7)	10(13.3)	23(30.7)
なし	生存(%)	10(13.3)	5(6.7)	4(5.3)
	生存+殻のみ(%)	10(13.3)	8(10.7)	9(12.0)